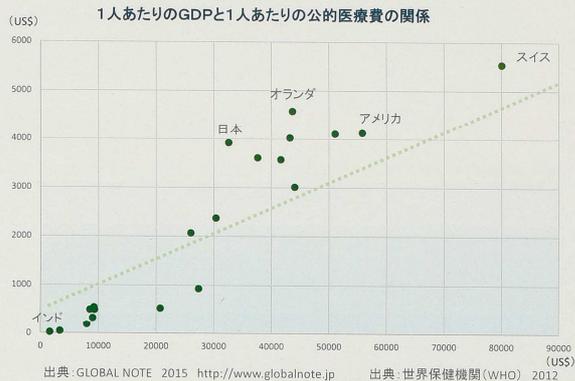
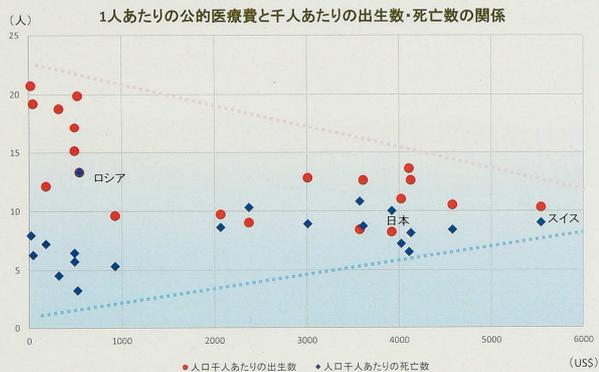


GDPとは
Gross Domestic Product 国内総生産。国内でその国の人が(1年間に)生産したサービスや商品の付加価値の総額である。

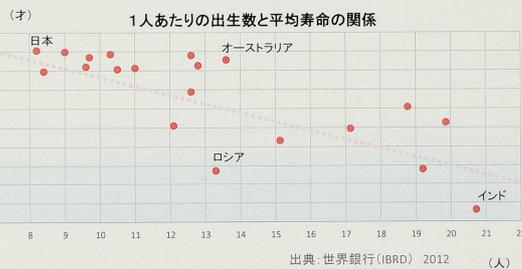
グラフを見てわかるように、アメリカが1番GDP総額が高い。中国は2番目にGDPが高いが1人あたりのGDPと比べると、貧富の差が激しいことがわかる。インドも中国と同じようにとらえることができる。逆にスイスではGDPは低い、1人あたりのGDPが高い。



1人あたりのGDPと一人あたりの公的医療費の関係を散布図で表してみると、右上がりの傾向が見られる。つまり、1人あたりのGDPが高いほど、1人あたりの公的医療費が高い傾向にある。



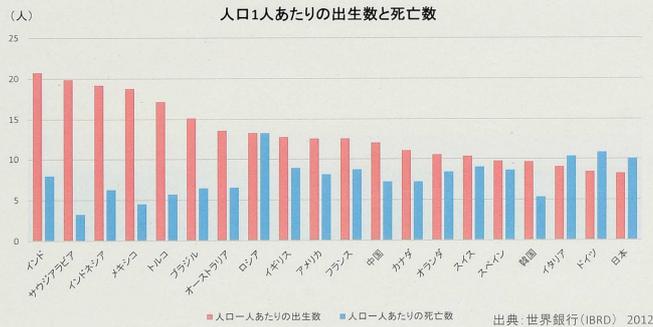
公的医療費と出生数・死亡数を散布図にしてみると、千人あたりの出生数のピンク色の傾向線は、右下がりになっている。また、千人あたりの死亡数の水色の傾向線は右上がりになっている。ロシアは出生数も死亡数も同じである。



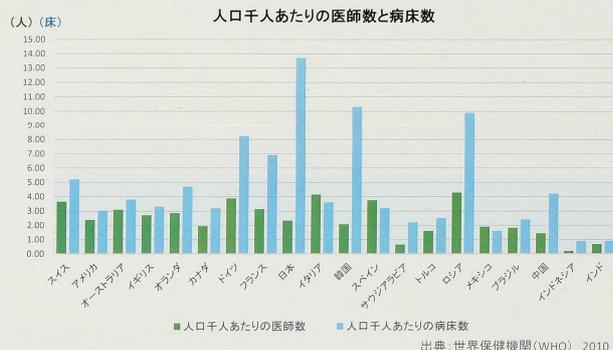
出生数と平均寿命を散布図にしてみると、右下がりの傾向になっている。また、面白いことに出生数が低いほど平均寿命は高く、反対に出生数が高いほど平均寿命は低くなっている。



死亡数と平均寿命を散布図にしてみたが特に傾向は読み取れない。国によって違うが、なかでもロシアは1人あたりの死亡数が多く、平均寿命もインドほどではないが他の国と比べて低いことがわかる。



この棒グラフは人口1人あたりの出生数が多い順に、人口1人あたりの死亡数と一緒に表し比較したものである。
(このグラフでは人口1人あたりの出生数の多い順に左から表記している。)
グラフを見るとイタリア・ドイツ・日本の人口1人あたりの死亡数は人口1人あたりの出生数を上回っている。
(この後2015年の日本の国勢調査において調査依頼はじめて人口が減った。)



この棒グラフを見て1番最初に目に入るのは、日本の人口千人あたりの病床数が多い点である。そこから比べてみると、日本は人口千人あたりの医師数はあまり多くない。
そして、全体を見てみるとインドネシアが総合的に医療に対する意識が低い可能性がある。
(このグラフでは1人あたりのGDPが多い順に左から表記している。)

【まとめ】
アメリカは世界で一番GDPが高いが、人口1人あたりの医療数と病床数で比べてみると少ない方である。このことから、GDPは高くても、必ずしも医療に力を入れているとは限らないといえる。また、インドやインドネシアは世界でもあまり医療が発展していないということが分かった。逆に、日本などは医療が発展していることが分かった。